

2021 年度 個人研究実績・成果報告書

2022 年 4 月 24 日

所属	サービス創造学部	職名	教授	氏名	西尾 淳
研究課題	芸術と商業文化				
研究キーワード	芸術と商業文化、芸術性、 哲学、芸術経営学、 SDGs、経済性	当年度計画に対する達成度		2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた	
関連するSDGs項目	9. 産業と技術革新の基盤をつくろう	11. 住み続けられるまちづくりを	12. つくる責任 つかう責任	13. 気候変動に具体的な対策を	

1. 研究成果の概要

私がこれまで問題の所在としてきた商業芸術の正体を明らかにしようとする研究は、2021 年度の「芸術と商業文化」といった基盤教育機構の講義を持つことで、理論的に整理することができた。それは、商業文化の持つ意義とその可能性を明らかにすることにも繋がり、その芸術と商業文化の持つ原理の探求へと研究を進展させることにも繋がった。そして、その芸術と商業文化の原理が、構造的原理と行為論的原理とに置き換えられ、芸術と商業文化の近接性への研究へと深化させることを可能にしたのである。さらに、その行為論的原理を、本学の創設者である遠藤隆吉先生の「治道家」の精神と、その精神を精鋭化する手法として「生々主義」とを基盤に据えることで、芸術と商業文化の持つ「まどろみ」から私は解放された。

そもそも、この二つのタームには本質的に相容れないものが介在している。それは芸術性の持つモラル性と、商業文化の持つ成功への希求という利己心である。言い換えると、あくまでも精神性を重んじる芸術が利潤といった俗物的なものを中心とする経済社会において存在しうるのかということが商業文化が直面する第一の課題である。しかし、歴史的に芸術を概観すると商業文化の中で多くの芸術家たちが自らの芸術性を洗練してきたことは明らかであり、だからこそ、芸術と商業文化は対立すべきものではない。

私は自らの研究の端緒を、私自身のキャリアであるクリエイターとしての暗黙知が果たして芸術的意義を担保できるかといった点においてきた。そして、この問題意識は講義を通じて、自らのクリエイターとしてのキャリアを学生らに伝達していくなかで、私自身が芸術と商業文化が近接性を持つものであるという確信を得たことにより、氷解していくことになった。さらに、この講義での取り組みが、クリエイターが商業文化に芸術性を刺激する役割を担ってきたことも理論的にも明らかにすることができた。事実、クリエイターは、ビジネスの場である市場に芸術的要素を持ち込むことによって、躍動感を与え、企業にイノベーションを誘発させている。そして、このようなクリエイターの行為は、芸術経営学、特にアートマネジメントと言い換えられる。このアートマネジメントは、さらに、芸術と経営学の関係性にまで広がりを持たせることを含意し、商業という我が国の伝統的経済活動に芸術性という新たな軸を据えることを意図している。

したがって、2021 年度においては、芸術をビジネスの部分要素から商業文化へと昇華させ、それを具現化する可能性として行政サイド、企業サイド、芸術家サイド、市民サイドからの分析を試みた。そして、このような商業文化は、現在のサステナブル社会では、SDGs の潮流にアートマネジメントとして吸収される。他方で、芸術経営学、つまりアートマネジメントの底流には 1966 年にユネスコにおいて採択された「国際文化関係の原則に関する宣言」がある。実際、この中で謳われている「すべての芸術・文化はそれぞれの尊厳と価値観を有し、その多様性、相違、相互作用のゆえに、人類の共通資産として尊重されなければならない」という高邁な思想がアートマネジメントに息づいており、それはアートマネジメントが現在の SDGs の潮流においても不可欠な考え方であることを指し示している。

その意味で、私は石井泰幸教授との共同研究において、私の芸術学の視点を経営学の視点に連関させること

を目指し、哲学という共通言語によって芸術と経営学との統合の可能性について模索を重ねてきた。現在、石井教授とはプラトン哲学を軸とし、これまで明らかにしてきたクリエイターの芸術性について引き続き探究を続けている。

以上が 2021 年度の私の研究であるが、以下に私の 2021 年度の成果を列記する。

- ・学長プロジェクトフォーラム（2月14日）ポスターセッションにて発表
「楽しい防災教育事例発表（サバイバルキャンプ in いちかわ / 車バイバル）」
- ・第6回 CUC 公開講座（7月16日）登壇
「国府台における防災対応としての『車バイバル』」
- ・ぼうさいこくたい 2021 にてポスターセッション発表
「楽しい防災教育事例発表（サバイバルキャンプ in いちかわ / 車バイバル）」
- ・石井泰幸教授との共同研究（4月3日～3月25日まで年間47回）
- ・哲学研究会参加
 - 第1回（8月20日）竹田青嗣先生
 - 第2回（12月5日）師尾晶子先生

2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

2022 年度では、上記の研究概要を論文化する予定である

【著書・論文（査読なし）】

学長プロジェクト書籍『SDGs と大学』

- ・「楽しい防災教育・フォトログ in いちかわ」（pp.205~210）
- ・「サバイバルキャンプ in いちかわ～サバイバル教育による地域社会の自助力向上計画～」
（pp.210~216）
- ・「地域交流拠点としての The University DINING 」（pp.229~235）

【学会発表等】

特に無し。

3. 主な経費

2021 年度の研究計画書に沿って適切に支出した。

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

特に無し。